
E n d R o l l とコンティニュー

塚本スズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

End_R011とコンティニュー

【著者名】

塚本スズ

【あらすじ】

俺、こと白雪燕斗は気付いたら草原にいました。それから、自分を神だというキャラ男に俺は死んだと聞かされました。なにそれこわい。…そういえば身に覚えが…。その自称神がいうには、俺は生きるときに大きな間違いか罪を犯したようです。一いちばん身に覚えがありません。どうやら俺は違う世界に転生して、その間違いだから罪とかに気付かねばならないようです。意味わかんねえふざけんな。

氣付いたら草原にいました。（前書き）

転生モノを書きたくて始めました！ 特にチートな能力を初めからもつてているわけではありませんが、なにとぞお付き合いをお願いします。

気付いたら草原にいました。

俺、白雪燕斗しらゆきえんとは、死んで、何故か美しい大草原に囮まれた花畠に来ていました。

……いやいやいや待て、いや待て。落ち着け、素数を数える。違う、これは何かの間違いだ、もしくは夢だ幻覚だ白昼夢だ。あれ、白昼夢ってなんだつけ？いや、この際そんなことどうでもいい。どうでもいいんだ。重要なのは、どうやってこの夢から覚めることか、だ。はい夢！　はいこれ夢！　むしろ夢じやなきや困る。歩いてバスが突っ込んできて爆発とかそんなのありえない。そんなの普通だったら死んでるし。死んでたら今のこの状態なんなんだよって話だ。俺は死んでない。当たり前。そう、これは夢。だから覚めろ。まじでお願いします。覚めてください。

「いやいや無理無理ー」

びくっと、いきなり後ろから声をかけられた。え、このパターンなに？　なんで俺声かけられてんの？　はは、まさかこれ神様つていうやつ？　ははは、まっさかー？

おそるおそる振り返る。そこには軽そうなホスト風の男。シリバーアクセサリーを首やら手にじゅうじゅう巻いている。全体的にキャラ男にしか見えない。

よかつた、お約束みたいな展開じゃなくて。

「燕斗くん、残念だけど俺まじ神様」

「なに言つてんですかんなわけないですよー。こんな俺の夢に過

ぎないんですから。そういう、夢じゃなきゃいけないんですから」「現実逃避も甚だしいよー？」はつきりと事故の瞬間覚えてるんだ

から諦めな？人生諦めが肝心って言つじゃんか？」

「その人生終了したらどうすんりやいいんだあああつ――――――

「まあドンマーリ」

「つづぜえええええええつ――――――――――――――

きらり、と白い歯を見せてくれる嫌に爽やかなチャラ男（自称神様）。無駄に顔はイケメンと呼ばれる部類だった。夢だったら正直美少女が良かつた。

「美少女の神様は今別件で仕事中なの！ 神様も暇じゃないんだよ？」

「はあ…、あれ？ なんで今考えてる」とわかつたんですか？」「

「そりゃあ神様だもの」

「だからこれはゆ」

「夢じやないよ？ もう認めたら？ 覚めない夢があると思つてる？」

シビアなことを言されました。笑顔で、俺にとつて全力的に絶望的なことを言されました。

「…本当に？」

「本当に」

「まじで？」

「まじで」

「…現実」

「まあ現実だね」

「…俺死んだの？」

「死んだよ。あっけなく

がくり、と膝から崩れ落ちる。

まじか。まじでか。夢でも幻覚でも白日夢でもなくて、現実。リアル。三次元。

俺は死んだ。

バスに轢かれて。

とりあえず回想。

「えーと、次は玉ねぎに、にんじん…、あとじゃがいも…」

片手に買い物袋を下げた俺は、近くのスーパーでいつものように買いたい物をしようとしていたけれど、急に今日、少し離れた方のスーパーで大安売りがあると主婦の方に聞いたので、そちらの方にいそいそと向かっていた。

なぜ青春真っ盛りの男子高校生が、そんなことをしているかというと、理由は簡単。母親がいないためだ。

父親は仕事。同じくすでに成人した姉もだ。結果的に残ったのは自分だけ。初めは姉がやっていたはずなのにどうしてこうなったか。姉が怖いので逆らえないが。

「ふふふん、ふーん」

恥ずかしい限りだが、主婦（主夫？）業がはつきり板につき、むしろ体に染み込んでしまっているので、大安売りと聞いてご機嫌で鼻歌までも歌いながらくてくと歩いていた。

後ろの方からなぜか騒ぐ声とざわめく雑音などを気にもせず、上機嫌だった。今日はカレーにでもするかな？などと考えていたとき、本格的な悲鳴が聞こえた。

振り返れば、すぐ目の前にある大型のバス。運転手は青い顔をしていて、目は大きく開かれている。耳障りなエンジン音と共にスローモーションのように流れていいく景色。逃げようにも、自分のすぐ後ろは壁だった。

俺に向かつて突つ込むバス。怒号のように響く悲鳴。熱い痛み。瞬間轟く爆音。

何も考えられなかつた。テレビのスイッチを切るように、俺の意識は途切れだ。

回想終了。

「……」

「どう？」

「現実か」

「うん」

「……今日の夕食どうじよひ?」

「混乱してゐるね」

親父達ご飯どうするんだろう。姉貴が家事できるから大丈夫だろうけど材料あつたつけ？ 確か米はあつたからいいとして、昨日の残りの炒め物は残っていた気がする。そういうえば牛乳がなかつた。姉貴は朝いつも飲むから買つてないと殴られるんだよな、失敗した。豚肉とほうれん草はあつたと思うから、豚肉のほうれん草和えが出来るかもしれない。卵も確かあつたはずだ。なんとかそれで満足は出来てほしい。

「…そもそも君もう死んでるんだからそんな心配しても意味ないんだと思うけど」

「人の頭除かないでください。結構深刻な問題なんですから」

「そうなの？…俺としては早く説明に移りたいんだけどなー…、
これからのこととか」

「これからって…、俺に『これから』はないでしょ？」

「そういうわけでもないんだよねー…」

死んだということは人生の打ち止め。そのはずなのにこれからがある？ 困った顔をしている自称神。どうしたことだ？ と俺が問うようにじっと神を見ると、苦笑して言葉を続けた。

「君はまたやり直しが効くんだよ」

「…はあ？」

「君が死ぬのは間違いだった…、本来なら、あの時に死ぬべきではなかつたんだ」

どうしてだかわかる？ と聞いてきて、迷わず俺は首を振る。だろうね、と神は眉をハの字にして笑つた。

「君は今まで生きてきた人生において、大きな間違い…もしくは罪を犯した。そして、君はそれに気付いていない。本来ならば、それは生きていくうちに償わしていくものなのだけ…、君は途中で死んでしまつた」

「…は？」

俺の口から変な声が漏れた。ぱちぱち、と大きく瞳が瞬く。

待つて、待つてくれ。大きな間違い？ 罪？ 何を言つ。俺はいたつてクリーンだ。真面目に生きてきたし歩道もされたことがなれば学校で問題を起こしたこともない。それこそ何かの間違いだ。

「ちつちつち、そういうわけでもないんだよねー…。大罪こそが人の性。^{さが}持たない人間などいないんだよ？」

…まあ、つまり要約すると、君はあの時死ぬはずではなかつたのに、なんの因果か命を落としてしまつた。死んだ魂は普通なら輪廻の輪を潜り、新たに生まれ変わる…はずなんだけど、そういうわけにもいかない。

君はもう一度、生きなければいけないんだ」

「…意味が理解できないんですけど…。だって俺、もう死んでるじやん。悪いことした覚えもないのに…、どうこいつことだよ」

「つまり、君をまた違う世界で転生させ、また人生を繋げるのさ」

「……は？」

間抜けな声一回目。

一瞬耳を疑つた。何言つてんだこの人。転生つて…転じて生まれる？　はい？　ホワッソ？

「残念だけど元いた世界の君は死んでしまつたからね、違う世界で新たに生きていいくしかないんだ。君はまだまだ若いから大丈夫。もしわからぬことがあつたら教えにいける。なんてつたつて俺神様だし」

「い、いやいや…話が見えないんすけど。ちょっと待て…、転生つて…」

「君は死ぬのが早すぎた」

ふつ、と自称神が真面目な顔をする

「燕斗、さつきも言つたように、君は大きな間違いか罪を犯した。それは本来ならば生きているうちに償わねばならないこと。しかし君は死んでしまつた…」

「あ、待てよ…？　もし、俺にそんな間違い?とかがあつたとして、こうやって転生する必要があるんだ？　そこまでして、償う？　…なんで？　俺、そんな悪いことをした覚えがないんだけど…」

「やうやく、どうにもならないよつた悪人の魂ならば輪廻することさえ出来やしない。けれど君のはそんなものとは大きく違っているんだ。そして、それを君は自分自身で見つける必要がある」

そこまで真面目な顔で言つてから、からり、と今度は普通の青年、いや間違えた。チャラ男のようにからりと笑つて俺を見た。しゃらしゃらとシルバー的なアクセサリーが音をたてる。神様なら外せよ。

「まあ、気楽に考えていいわ。正しさとか罪とか、それは人がいるのなら自然に生み出されること。新たな人生をエンジョイしようか！ みたいな感じですか？」

「……かつるいなー……」

「重くても困るっしょ？ まあ転生先なんだけれどね……、ねえ君、ファンタジーって聞いて何思い浮かべる？」

「……は？ そりゃあ冒険者とかモンスターとか……」

「うん、つまりそこに行くの」

「…………は？」

「さつてねー……それと……」

「待て。おい待て。すごく待て。はい？ どうこうこと？ 今結構衝撃的なこと告げられた気がしたんですけど」

「いやさー、世界つてのも結構たくさんあってさー、んで君が行くところがそこ。変えることは無理だからねー」「はーはーーー？」

「言語機能は大丈夫。文字も変換されるようにひゃんと読み書き完

備だよ？ まあゆつくりやればいいさ。頑張れ？」

「ま、待て！ え、俺そんなファンタジーなどこの行くの決定？ まじで？」

「まじでー」

「かつるー？ 僕のこれから先の人生すげーかつるい調子で言わ

れた！？」

「いや、こういづのはノリで突っ走っちゃつた方が楽なんだよね？
深く考えたら負け負けー」

「え、えええつ！？」

「こいつ恐らくすっげえ重要なことをノリで突っ走れとかなんとかい
いやがつた！？本当に神様かこの男。

「無理無理無理、俺普通の男子高校生ですから、そんなとこ行つて
も生き残れない。あ、でも、お前なんか神様なら強い能力くれたり
は…？」

「しないよ？ 神様が大体チートな能力をくれると思つたら大間違
いだからね？」

「どちくしょうがー！」

「そうだよな！ そんなんご都合設定あつたら苦労しないか！ 無理で
すよね！」

「君の目的は自分の過ちに気付くことだからね…、もし気付いたと
きには新たに選択できるよ？ この世界で生きることを終わらせて、
元の世界の輪廻の輪に戻るか、それともこの世界で生きていくか」

「…なんだよそれ」

「そもそも世界と言づのは別次元のよつなものだからね。早い話三
次元と一次元を思い浮かべてみなよ。まさか自分が一次元で生きて
くなんて思わないでしょ？ つまり世界そのものが違うからね、輪
廻の輪もまた別々なのさ」

「…そーですか…」

もう説明をいちいち聞くのも面倒くさい。結局俺は違う世界で生き
ていくことを逃れられない運命のようだ。

「まあまあそんな気落ちしないで…、というかさ、君もともとスペック割と高くない？ ほら、家事万能、運動神経抜群、喧嘩も強くて、勉強はそこまで出来るわけじゃがないけど頭の回転は速いし。本当リア充爆発しろとか思われるよ絶対」

「…そんなもん、モンスターが現れたら簡単にやられるじゃねえか

…」

「そういうわけでもないよ？」

…そういうわけでもない？ 僕は自称神の言葉を聞いて、顔を上げた。自称神はふふん、とむかつく顔で笑っている。

「いい？ ももも世界 자체が違うんだよ？ 星が違うとかそんなじやなく、そもそも次元が違う。つまり、元いた世界の法則は通用しないってこと。理だつてまつたく違う。魔法だつて飛び交うし、剣も交じり合つ。そうぞ、君にとっての異世界なのだからね」「…世界が、」

「うん。それとね、その世界の人たちはみんながみんな魔力を持っている。だから君にも『魔力核』を転生するときには入れておく。いわば魔力の種。それがどうなるか、どう育つかは俺だつてわからない。神様はいろんなことを知ってるけど、未来は見通せないんだよ。つまり君は強くなる可能性だつてある」

「…」

「…どうしたの？ さつきからおとなしいけど」

「…なんかいろいろ言つてゐるけどさ、総局のところ…、無事は保障できない、だろ？」

「…………、うん」

「どうくじょうがあああああああ…-----」

自称神が言つには、言語能力と魔力核だけはあちこち同一のものと

する、らしかつた。言語能力は正直ありがたいけれど、魔力核の方はようわからない。

自称神いわく、どうにも変化する、ということでの魔力核が俺に出来て、どうなるかはわからない。もしかしたら強く変化するかもしないし、普通の人と同じようになるかもしない。けれど努力をすれば結果となる。とまあ結局のところ先のことは知一らねつと投げ出されたわけだ。とりあえずこの神は語尾にをつけるのが趣味なのか。うざくてたまらないのだけど。

「まあ、そろそろお話も終了かな？　さて、君を違う世界へと転生させれるよ。…あ、面倒くさいからここのままでいいよね？」

「…もう、どうでもいいです」

「あ、そうそう転生してくる人もう一人いるから。仲良くねー？」

……はい？ 初耳ですが。

田 覚めたらやはり異世界。

何かを叫んだような気もするが、それなのに俺の声はだんだんと小さくなっていく。あれ？ なにこれ？ と思うが、それは声が小さくなつていつてるのじゃなく、俺の意識が遠のいているからだと気が付いた。

なんだか、死んでいくときと似たような感覚がして、ぶつん、とリモコンでテレビの電源が切れたように、おれの意識が途切れた。

まず、俺の今までの人生を見直してみよう。

母親が幼いときに死んで、親父も姉も酷く泣いていた。そのときに俺は思ったのだ。『この人たちを守ろ』、と。

…守れてねえじやん。俺死んじやつたじやん。そ、それはいいとして！ よくないけど！

つまりそのときから俺は努力するよになつた。勉強の方面はあまり向かないし、姉の分野（弁護士を目指してた）だったので、体力をつけて家のことをして、将来は働きに出ようと思っていた。

親父は母親が死んでから、俺達のために必死に仕事に取り組んでいて、たまに倒れることもあった。けれどそのたびに体が強化されて、いつてるらしく、この前チンピラに絡まれてる女性を助けたらしい。どこのヒーローだ。しかもその際に女性に惚れられたらしく、何度も迫られてるのを見た。しかも同じようなものを違う女性で。どこ

のフラグメーカーだ。まあ、親父は母親一筋だつたらしげど…、つて話逸れた。

つまりそんな親父の様子を見ていた俺は、ひたすら頑張った。親父みたく、家族を守れるように。三人しかいないのだから。だからこそ家事も進んでやつた。…最近はむしろ楽しくて料理権は全部頂いてるけど…。ついでに親父を見習つて、少なくとも変な輩からは大事な人を守れるように力もつけた。そしたらどこからか俺が不良だつて噂が流れただけど…。そのことについては姉に腹を抱えて爆笑された。ちくしょう。

部活は小学校から陸上部に入つていた。ここだつたら運動も出来るし、走ることだけしてればいいしそこまでお金もからないと思つたからだ。…実際は遠征費やら何やらしたが…。そしたらいつのまにか走力が群を抜いていた。やることなくて走つてただけなのになぜだ！？ ちなみに大会で優勝したこともある。

…つまり自称神が言つていた高スペックというのは、全て家族のために頑張つたものなのだ。

こんな俺が別世界に転生とかありますか？ 今頃親父と姉はどうしてるだろうか、と考えると胸が痛くなる。結局のところ、俺は家族を置いていつてしまつたし、もう守れない。そう思つたびに泣きそうになつた。思春期ぐらいの年だが俺はやはり家族が大好きなんだ。親父、姉ちゃん、死んじやつてごめん。

自称神が言つていた自分の間違いか罪をさつさと見つけて、こんな世界とオサラバするか、と俺はそう考える。だつてそうだろ？ こなんいつ死ぬかわからない世界より、あの世界の方が良い。もう、親父達の元へと生まれることは出来ないと思つけれど、あの世界は暖かいものがたくさんあつたのだ。

死んだ母親のぬくもり。親父達の笑顔。友人達との騒ぎ声。今考えると、それはとても大事なものだったのだ。早く、早く帰りたい。

帰りたいんだ、俺は。

「…………ん？」

目を開けたらそこは、先ほどまでいた草原ではなくて、ましてや見慣れた天井でもない。

木々に囲まれた雲一つない青空。太陽の日差しが葉と葉の間に入り込み、緩やかな木漏れ日となり、俺を照らしていた。
ざわざわと、普段は聞きなれない森のざざめき。空気も澄んでいて、息を吸うたび清純な何かが体を通り過ぎていくようだつた。

：ビバ・異世界。

はいはい俺落ち着け、さつき説明を散々聞かされただろ？ 落ち着け落ち着け落ち着け。息を吸え、吐け、大きく深呼吸だ。ここは空気が綺麗だからな、吸つて、吐いて、吸つて…、ほら、気分が落ち着いてきただろ？ 大丈夫だ白雪燕斗。俺は出来る子だ。ほら、状況確認？ 頑張れ俺、すごく頑張…、

俺は悪くない。俺は悪くありません。普通の感覚ならこいつな
つてもおかしくないはず。

「まじか、まじで異世界か？ 夢でもなくて？ やっぱり現実…？」

試しに頬を抓つてみた。痛かつた。現実であり夢じやない。自称神に言われてたことだつたが、さすがに目の前に現れると戸惑うし、驚く。それに恐怖もある。

…まじでか。

「わあああ……と頭を抱えて大きく息を吐く。そのときにふともぞり、と動くものがあることに気付いた。

どうにも上ばかり見ていた俺だったが、それは、俺のすぐ近くの真後ろにある、なんか生暖かいの。

え、モンスター？

一気に血の気が引く。確かモンスターもいる、と言っていた。でも、

『さあさあ…』と油の差してないロボットのように振り替えると、そこに

「は？ 人？」

氣を落ち着かせてもう一度見れば、それは神社の神主が着てるような服を、動きやすくしたような感じで…、狩衣、と言えばいいのか

? つまりそんな感じの服装をしている、人間、だった。
その瞬間、自称神の言つていた言葉を思い出した。

転生してくる人は、もう一人、いる……。

もしかして、と思い、その人間の顔をまじまじと見ていた。
多分同年代。明るい茶色の髪で、所々飛び跳ねている、というか横
跳ねの髪型だ。頭部の後ろを見ると、案外長い髪をしているらしく、
下のほうで縛られていた。

…日本人、なのか？ この衣装は和風っぽいんだけど…。
そう考えていると、その狩衣を纏つた人間の瞳が、開いた。

「…んにちは」
「…？」 状況を掴めていない。
「あ、おはようございますなのか？」 「ううう場合は」
「…」 考え中。
「お前もあの自称神に会った？ あのキャラそういうな」
「…？」 混乱中。
「ところどころ異世界なのかな…、見たところお前も転生してきた
人間だよな？」
「…！」 思い当たる節を見つけた。
「まさか本当にモンスターとかいたらどうすりつか…お前戦える？」
「…っ！！！」 思い出した。
「…どした？」
「…」 本当に異世界…？
「あ、やつぱりお前俺と同じか」 平然。

俺は人がいるとなんとなく気も落ち着いてきた。こうこうとも「//
ユ力大事。…あれ？ 違う？ まあなんでもいいが、似たような人
がいるというのは、案外支えになるものだ。

「え、嘘…本当に来たんだ…。これは、喜ぶべき…？ いや、悲し

むべきこと…？」

「おいお前なんていうの？　名前？」

「え、へ、な、名前？　て、ていうか何でそんな落ち着いてられん
だよ…」

「いやさつき散々驚いたけど…」

そりやあ驚いた。凄まじく驚いた。限りなく驚いた。実際叫んだし。
だからそんな変なものを見るような眼で見ないで頂きたい。
見た目ではあまり見分けがつかなかつたがどうやらこいつは男らし
い。瞳は俺と同じく黒色だつた。なんだ、普通に日本人っぽい顔立
ちだ。

「俺は白雪燕斗。お前は日本人？」

「にほんじん？　俺はそんな名前じゃないよ、忌月、それが俺の
名」

「…日本人じゃない…？　苗字は？」

「苗字？　そんなの位の高い人間がつけるもんだろ？」

「え、お前どこから来たの？」

「香耶の国、列峰領の治める…」

「もつとい理解した」

「こちらも違つファンタジーなのか。

田原めたりやはり異世界。（後書き）

同じく転生してきた人は男でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4559z/>

End Ruleとコンティニュー

2011年12月16日19時03分発行